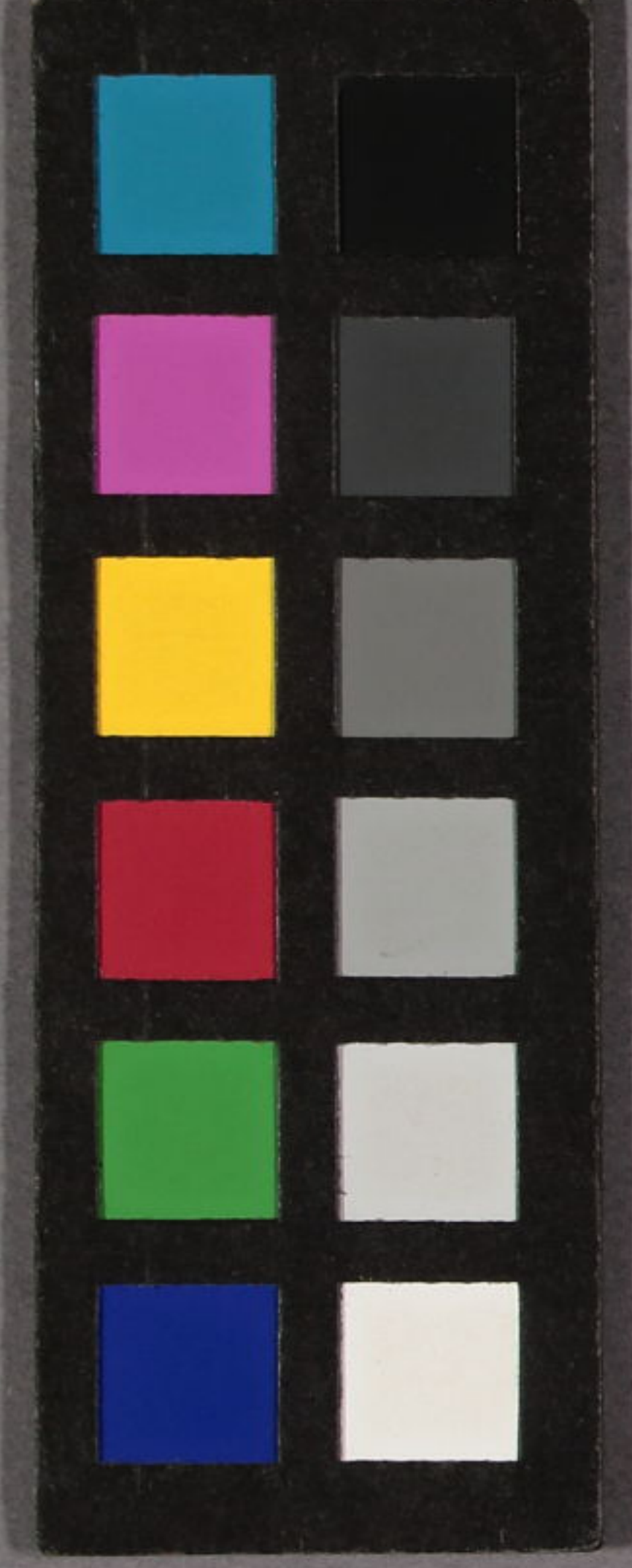
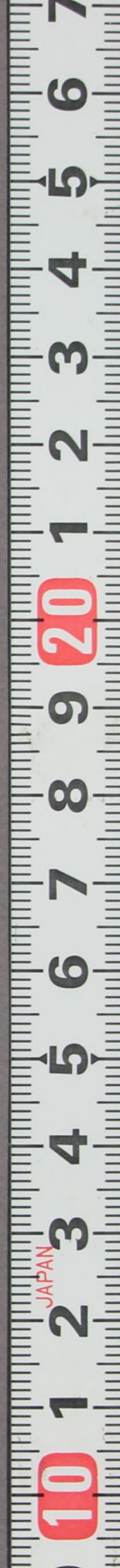




俳諧
流行七部集
上



新蛙合 雪りり 蛙 汲 虎 狐

風りり 長月集 月又紀 負部 斧の柄

附錄 今世宗函之十六人發句集

俳諧 流汗七部集 全二冊

文政三辰乃手新版

書坊 獻可堂 群玉堂 合梓

文榮堂

叙

語云子絕四母意母必母固母我蓋聖人雖大乎以虛為主而所以不認也 本朝輒近有俳諧者流其源出於和歌焉今人頗以芭蕉翁為宗其所造亦以虛為主而不苟認也且浪華有二三老人即翁之流亞也所謂遊於向上之一路者也其徒有齊岡氏號七杉堂嘗輯錄古今稱蛙鳴俳句若干章加之以自化之判詞乃將附刊願以公世焉一日袖此稿求序於予予卒業曰昔南齊孔珪風韻清疎好文詠門庭之內艸莖不翦中有蛙鳴居常愛之語人曰我以當兩部鼓吹王晏嘗鳴鼓吹惟之間群蛙鳴曰此殊聒人耳珪曰我聽鼓吹始不及此晏有慙色云可謂孔珪能愛蛙鳴人也本朝嘗有素門蛙因者好和歌每藏于蛙擬於囊底

云此豈愛千楸乎愛蛙鳴之極蓋至千此今乃今有此
撰也慕世蕉翁之古而以虛為主不敢認寧也雖嘗孔
珪能因異所為乎於其愛蛙鳴之一趣致而已矣可謂
好古以槌向上之一路者也予亦有好奇古之癖因以嘉其志
而為之序

寬政十二年龍集庚申夏六月望日讚岐散人居然題於
浪速上街僑居

可紀國あはれ序

貞享はるる女はるる心はるる人をももる池の二句と事乃
初と姓合てるるを選ひ素重を角仙化の人と判るるを
海川の底よりしるるを物より早るるを人皆是れ
まてとやせらるるはれとすてとをせはるるをせはるるを
やめはるるをせはるるを七松堂のあはれとせはるるを
はるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを
やめはるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを
ふくはるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを
おはるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを
後世にせはるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを
ひくはるるをせはるるをせはるるをせはるるをせはるるを

わづきはききくきわけくくく
ふくはてふくくくくきくく
きくくくくくくくくくく
は初て一本森くくくく
おつくくくくくくくく
つくくくくくくくくく
度海を戒めぬくくく

丁江 夏江 水儿 栢後 井眉 雪濤 都友

一番

左勝

玄寅れくくくくく
右

野水

朝上三

秋よきくくくくく

西葉

けつねくくくくく
あけきくくくく
暗跡烟雲凝思練若くく
まへくくくく
若依くくく
かみくくく
幽遠くく
おれくくく
さくくく

うきとよきうけつていけつてふりて
毛やうり国やけいあつてふりていけつて
やきうりるんはのうきいけつていけつて
作者は自己と早下いけつていけつていけつて
うきとよきうけつていけつていけつていけつて
うきとよきうけつていけつていけつていけつて

不二昇判

ふりていけつていけつていけつていけつて
かくはつていけつていけつていけつていけつて
短きいけつていけつていけつていけつていけつて
尺丈 七逸 事後

二番

左勝

ききうりていけつていけつていけつていけつて
蘭里

右

藤りうきつていけつていけつていけつて
麦士

右清水流る柳うけつていけつていけつて
ききうりていけつていけつていけつていけつて
右藤りうきつていけつていけつていけつて
けつていけつていけつていけつていけつて

長月昇判

三番

危持

りちつゝまなつゝ流るゝものれ

麻父

右

ちんかてりゝやまゝと啼一嘘

蕉里

言ちつゝまなつゝ流るゝものれ大河なとわ
まゝにうけちゝまゝにうけちゝまゝにうけちゝ
はゝとせれ御珠かゝゝ衣衣より被座
もちりてほのゝ側隠れゐるゝなまゝのれ
持ちちゝへゝゝゝ

桃處

附上五

嘘啼て棲うゝゝゝゝゝゝゝ
すぬけこの夜とらつれ嘘一かゝね
尻かゝらゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
嘘啼て喜れゝゝゝゝゝゝゝ

升六
一峯
雀雄
魚眼

四番

左

嘘とむつゝゝゝゝゝゝゝ嘘

越人

右

嘘一嘘ゝゝゝゝゝゝゝ月のゝゝ

亨

瑞馬曰車はけりゝゝゝゝゝゝ方丈苔の道

靡錦もやらん眠る飽て起つる園宮なりと
盟歌よりあうく時を新やま宿りてあそん
おとてあけは河原をみるは田舎れ
あそぶ軍情をさそりて万葉は位と葉
夜のみ
同くあそぶはたなめおとあれてまよふれ
たき山流るあそまはあうあひく親
たるを批評したるを歌へてさうかきあ
しはくあそぶあんなきあかきあそぶは
にきくとして風のまよへくあそぶのえんそ
へくはあそぶのえんそ

五番

左持

一思案出たて飛せうまつうれ

鶏山

右

ひさあうあそぶあそぶあそぶ

李杏

左を分別あうり右はあそぶあそぶ
賢あそぶあそぶあそぶあそぶ
あそぶあそぶあそぶあそぶ

黄華弁判

六番

左

ききして房をおも羽は地くれ

無村

右勝

かさく一とちもやなく地

麻帆

仏あより南無ふもあふくにてふもこれ
と我のきく一とちなき我をあふかりふを
かなふも又あふかりふもいふもや名同
利欲は迷ひて一とちあきふも入あふを歎
くかなふもあきふの席は終つてふも案
けひ房はあきふ羽田の地はきふもあふ已に
きふあふらんあふりふもあふりふもあふり
同いふは測の名を得るかなふらん

新上七

緩駕判

七番

左持

けり水は足ふとのまはくもつれ

芦本

右

溜池は月あふりふもつれ

屋春

孫生はくもあふりふもあふりふもあふり
地はくもあふりふもあふりふもあふり
月あふりふもあふりふもあふりふもあふり
あふりふもあふりふもあふりふもあふり
あふりふもあふりふもあふりふもあふり
あふりふもあふりふもあふりふもあふり

あえんや

桐葉宇

八番

左

蜂 吞んぐ已もなむななり

和賤

右

蛙 鳴くは是石のくちを

自積

た面もろきとみくく山越てんく
こそめさぬいふなまてようこそなん
右いすのまきた丸かき袴はけり
なやまかき袴けりまき以綴求るをいん

新上八

七叔堂評

井のまきかきうらぬ蛙

祠冠

松のまきかき

松のまきかきひるまきかき

桃源

揚名の宿のくちを

半江

うたのちるまきかき

松菊

なつを中うて

竹雄

蛙ひる花うらと

花洲

かきうらゆく

自樂

花のつゝ蛙鳴なり

魯隱

接ぬおとやうまいて

長齊

ちう川やあけき雲を啼中城
朝月よ初あらしうちうち

駱 營

九番

左

善ふかとうつて毎ふかふ

希因

右
錄

あしき事なれば

蜂友

法階のひきりこまるまをわう上達部の
あけむらぎなまひをつくせふの妙れと
うむぐりの木のひあはよりふたを解き将

新上九

めちうとうふく

漫

本松の松はなうりて
 榎とて芥やきとる日南水
 なうりて鉄よりなれ田の榎
 田のかゝる足ぬるなり水は啼
 桐油も兒なると榎と可なり
 榎もなり榎もなり榎もなり
 さたくの雲ともなうりて
 湯江はなうりて
 唇はなうりて

蓼太曉臺
闌更大魯
几董若翁
漫春
仁輔

夕ぐぬの垣ねとくふかきつゝ 葛き

十番

左

日はあんなく月よ鳴出と垣ふ 玉城

右 據

鶯ねとあゝて田毎に垣ふ 抑化

左 登ねの姿情とつゝ右 妻暖の時候
とつゝさびしき月よ鳴出と垣ふと
田毎と
つゝとあゝて田毎と

絮香漫評

都上十

十一番

左

鳴ささけ入相きうぬがさつゝ 落梧

右 據

鳴かきつあけけつとささきけり 米菰

ねとささきけりた垣の姿情と垣ふ
左 ありささきけりた垣の姿情と垣ふ
又 理席とささきけりた垣の姿情と垣ふ
かん二念ねささきけりの本情と垣ふ
りけりたとささきけりた

雲根舎

十二番

左 羸

夕やこれ唐細といふかきつて

一井

右 翰

まゝもひあつてうゝかきかきつて

緩駕

田家蛙誰那を旨趣未及細裡蛙
新奇有幽味是以左句為優細蛙
也田蛙也莫嗤余井蛙見幸甚

嘉會室亨評

十三番

新上十二

かゝるんては又居てもかきつて

松下

右 榜

月うきれ丸をなするかきつて

蓬宇

居てもかきつてのうゝかきつてのうゝ
くゝゝのうゝかきつてのうゝかきつてのうゝ
まうけ得て幽翫なるかきつてのうゝ
いゝゝゝかきつてのうゝかきつてのうゝ
へゝゝゝかきつてのうゝかきつてのうゝ
まゝゝゝかきつてのうゝかきつてのうゝ

巖耕舎芥水撰

十四番

年強のち人知るる法これ

右

軍を水に喝かす

桃霞

右れふたあきききよまてふ面の暈は
見て聞かへるうきさう足出するおありと
うきを金張のやうななるといへるに在
しき一事もあつてしかば餘情ある
可うもいふ様にもへん

浣花園可董評

新上十二

十五番

左持

乞食子妻其子於其地

六

右

蛙啼升井細道をくじ

空来

たゞうゑにちをさしけりなき名羽田の種は
へ人も今の人もあるはきく傳へ作てた
とまふねども是れをぢるゝも常む

長齊

何子雲書

八重

禪寂をかりしをかりかし

子字押出さるゝ

馬章

代々居る家畦のみを

時習

うきまねくまふまふのむすめ
宮仕所の女は廣く鳴りて
啼き泣きまふまふのむすめ

駒峯
楚山
止陶

十六番

左持

朝川くま背中のひらきつて

乙州

右

聖のまらぬまふまふのむすめ

瑞馬

左の相つらハタはむと向く月
けえとつらとつ二説はむと向く月

新上五

あつとまらぬまふまふのむすめ
桂のつらとつはむと向く月
やとつとつはむと向く月
かたも思ひ出るまふまふのむすめ
うきまねくまふまふのむすめ
像儀つらとつはむと向く月
まふまふのむすめ
まふまふのむすめ

成美判

たもまらぬまふまふのむすめ
桂のつらとつはむと向く月

蒼乳
斗入

すりちりふひふふふて啼成美
わつふふふふふて啼椿堂
嘘ふふふふふて啼士朗

十七番

左

榴涼苑

右

夕斧水

一城のわがまふふふふふて啼
ほく有ふふふふて啼

十三のわがまふふふふて啼
わがまふふふふて啼

大いん

十八番

左 持

啼柳居

右

泣可董

わがまふふふて啼
わがまふふふて啼

みきりくろく男

紫角笛判

十九番

左

菜花冠
李由

右
集

晴て雲はくろく月長
 繁香

鄒上六

葉花と身うちとつち　　性といふ濃神
 なるく　　右小田は性よりなるを　　唱へて
 ありとくそり　　性も去れぬものありとて
 性を我といふく　　や右の　　性のはる
 情のつよもあはるる　　心をやむ

耒耜

二十番

左

結接あ日と明々
乙由

右

降つての系雨の中かき鳴らす

左右魯衛之政也

樗道人

波花を足て洞くむる月成
 煙啼おけやるまひる集て
 湖へ手とうちけて啼かき
 煙啼ておきあゝ威きり
 きり人こころれ啼煙
 水うら煙のそらみゆる
 田け煙啼かうきり岸の松

大阜 羅城 岳輅 素磔 蕉雨 卓池 樗道

郭正夫

かけり名昭き亭して雪の畦
ひらひらひて大さけ嘘啼ふをり
廣に又嘘けきけあきけり
ほれうう朝の雪啼嘘

玉屑 一草 文雅 月居

梯不分題地辭上以字

くらみ組もあふけり
 右の書とて下は書か
 け道の風韻のすく
 事とせられも仙人
 三弦尺八中とかへ
 うりも入るおのう

岸より舟をもちて浮きけり
舟の隙盗人となりて花の
水もれちやあやめいといふ
あやめいといふ

瑞馬

つるもれ後わちくまけり
月より山風よりあけやき
横折て盗人よりあけやき
足音より奥より横折の花
うりやきよりあけやき
眠るよりあけやき

大坂 八千
友國 百堂
巴洞 巢西
銀柳

つるもれ後わちくまけり
月より山風よりあけやき
横折て盗人よりあけやき
足音より奥より横折の花
うりやきよりあけやき
眠るよりあけやき

瑞馬

つるもれ後わちくまけり
月より山風よりあけやき
横折て盗人よりあけやき
足音より奥より横折の花
うりやきよりあけやき
眠るよりあけやき

つるもれ後わちくまけり
月より山風よりあけやき
横折て盗人よりあけやき
足音より奥より横折の花
うりやきよりあけやき
眠るよりあけやき

上巳

如稻

夢れ宿くもれく二日下
夕さう聖の念も大事に
さみれやうけしき八松の上
下は中々れを嘆き苦しむ花
喜け水喜けき波いつあきく
筆や握ておく月も松の影
花もろくまふよ梅は月影に
やふ入れ妹の背さふさう柳
花もろくや鬼灯もふやうな
いとたひも喜めあき宿れや

京
花雪
城人

馬印

其成

完来

午心

大和
素外

吐露

兄弟

石方

萬葉の月うすくしきめを

檣津

索瓦

花はきくすのうたをうへる

其風

梅道人文字卷之九 崔篆

雲

けきあふ小雨の中や炊く

瓜坊

松風上松竹雪梅

稻丸

紀行
とちきりやふさく

五
鳳

此花也 一四七

南湖

夕く通やうと牡丹のかきそり

四角

時乃知雄南

士川

此女乃一子也

布

應永雨ふもくもくもく

仙舟

入月のかき印花よのつりきり

未塵

郭正士

号や楊々居眠る朝は雨と
ちれは戻る本は花の目救ふ
あひは破ついでより子然
そはくの縁あり難と転々
初花はあきききききき花
き山うききききききき
あ月はあききききききき
三月はあききききききき
ゆく水はあきききききき
朝風やあきききききき
白奥やあきききききき
あけであるうききききき

淇舟 三河 東河 茶筵 木朶 近江 可重 祐昌 干當 陸奥 恒九 出羽 五明 越中 壺仙

却巴けうきききききき
たのうきききききき
あきききききききき
あきききききききき
あきききききききき
あきききききききき
あきききききききき

布舟 分下 蝸國 長門 花休 万井

源川 田舎

あきききききききき
子然 西行 若は朝より

三河 菊潭 桐茂

秋蛙

あきききききききき
居然

居然

音輪彙集

うたのさふはな

かたはるす

蓮葉はあより包より家涼し
 人語りかきも味けり
 御車は傍へ来り舞をまかして
 咽けりさきと梨子試みけり
 夕月をけりけり出る好
 旁をけりけりけりけり
 太切れ文節は封かき
 寺号いとしハ志は法中

奇測 来記 病忌 測 記 測 忌 測 記

乾 魚 豕 乾 例 豕 乾 例 豕 乾 例 豕

測 靴 呂 測 靴 眼 罟 靴 測 罟 眼 測
綢

わく尻のるゝ由貴とも兼は安き
ま川をときふのまふ田はた鴨
花の家初花すてゝあても待
杓花びらつてもあそふ一胡

調謝 乾 調

あはれふ花はのりあて

白ひあまきうきうき

大くくを家をつふし柳式
もるけるふと山に解 夫
そ雀鳴きをやつて解解て
ささけるやふのふもる川、

瑞馬
朱紀
る

名二

月の友繁うへ屋の松風こ
移れ白ひをねのよわひこ
梳中きぬ虫さかいてうき
兄とれ中の遠き人
砂あふはほふ清めれふあそ
木を刀けおの透る寂 越
四月く山事ふ明もあ
ほくふり水け細れ縁就
鳥杖をばうきふあはよる
凡中をおりふある板の本
出着の男をうきふあは花のみ
蝶れむきふあは供いそく

月憲
、
乾 乾 乾 乾 乾 乾
シサシサ

夫にけしと朝のあけの岸の月
 親の首 遠の竹葉かきけり
 履ものゝ抱かれおひつきて足
 押ひひきつるお出でていふ
 奇種はあゝ重は降るに消てのき
 る戸のふかきふかきなる
 戸那山と隠れよと近かき
 やききおききと細と提り
 卯の花はあけけき風は小窓の
 くる屋は素れきけきと田中
 一り伏てはききと格のあ
 子うら子実の背は抱ひけき

サシサシサシササ、シサ

いさゝかほをほくあけ野庭は阿
 いさゝかほをほくあけ野庭は阿
 菊は名もくつはあけつとく
 石拾ういと事て有れ
 限とるなるの入る結とて
 肩とあけのたまふ月
 万がけ出てある及花の
 六機とけいふ子れあけ

紀兼紀兼紀、サシ

あけとくたふくうはさ
 けりけりおきき

シヒシヒシ、眉、靴、井来
眉報

署
記

シ笛耜、管笛シ、眉、耜眉、

流水のわが河を車もれ
 かきあけ砂も嘆き鶴歌
 くれ縁はさひなき月の
 虫おしるも雲しるる
 名残る高観音たつきま
 十九き人れ情のや
 城を忍び旅よ出かる朝の
 曲実のなき火の戸より
 さうしう車れ巡るまき水
 筑ふ少せおく雛のあう
 神花といひ初しもきけ
 けつと茨れ枝る芝花

笛シ笛シ笛、シ笛シ笛シ笛

五
 五

秋の月をみまじ曉の光

あくさあ

我の心をけり終るも秋の
 庭れ水のむ山川の月
 けきききみみれく横を
 笛れうらのちりよよき
 結りけりひやうき風
 ましを流るる水より
 針はれききくもむ水花
 娘はきききかききき

外六
 来六
 来六
 来六
 来六

[illegible]

五王五王五王五王五王

王執王世

はよふぬちをうめ

うきぢやな

尼外海
束起
、
海

卷七

海、江、海、乾、海、乾、

ちりほも八重山のきうへ
 伏蕨くの戸をぬく月
 をさすけあはるる様ううとふ
 いやとさうたり時れ羽ねと
 いとさも捨てゝあけられな
 笠さるるまけ何とわいふ
 茅妻ハ皆鶴のけしき
 雪れ解奥の雨ささあや
 打やきく宗祇住居と名を付ん
 沸如く買れ杖さともやさん
 ころあけねを大勢見よあま
 あけふくみも秋ささうあま

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

こけ月を極めてふなうさ
 まれ手作の鶴政の嘆
 せしと風さうける数たみ
 けしよりいれ宿のさわり
 かうるまけきさみうもさかこ
 連歌のささうひさうれ
 おうまうとまけハ様れ夕日
 はらかたけく地さきけり

何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

菊をおく人の花れ
 へんやふちふちうさ

梅さへも冬を急ぎくもささふ
 うくも移ひけ候居を法、
 雪けの芳う并生とおりのさく
 子のちりさや一鶴をみへり
 毎く一け月入る楳をみへり
 柳け寄来さも芳けあさうち
 昔け秋浦をけつる廣うかき
 下戸とるくけつるれうき
 病うさくく鳥帽をけ紐のり
 何よりうきを金屏け并
 朧ふひさと奥け赤この花きて
 しるの雛さきうけ口笛

謠 紀 謠 紀 謠 紀 謠 紀 謠 紀 謠

詠み

さくし垣根も足さや小あゆむ袖も一や計
 うーとさうやきあゆむ玉け都玉川さうさ
 やあゆむ文化四年三月十八日同好み人かんく
 十時葺を詠を川張子履をききといふ言ッ石
 をさへいせ事けあさなたさ

け 妻け人牛馬さかへきり 蜀竹

十二社の池のめくを模たけ

本んちるやゆめりやなふ小鴨 謹お

詠 け け け け け け け け け け

人くきふたさ

細け垣より露筋を烹ふ
さるきれ神の刀をかくさる
升けきや一の面は神を以
まきふと墓おく人のまきふ
蝶のしるきふしるきふ
ゆきふしるきをめてまきふ
本辰れ鈴のれきも 功き

双湖 祝 物 友 準 谷 竹

十方なりぬ
まつひく宿を居るまきふ
やいひのしるきふ
まきふをあつふまきふ
まきふも花れ咲きやまきふ

無況 右権 桂宇

さく玉川となりぬ白きまきふ
まきふも花れ咲きやまきふ
まきふも花れ咲きやまきふ

本辰本辰芽垣おきまきふ
水よりかむ花よりかむまきふ
まきふも花れ咲きやまきふ
まきふも花れ咲きやまきふ
順和亭れあひまきふ
蝶のしるきふしるきふ
蝶のしるきふしるきふ
まきふも花れ咲きやまきふ

護物 胡準 甘治 桂宇 對竹

白方 胡準 道夫 謀也 朽木 波靜 豆名 桂宇 雙湖 右雄 并谷 玄說

竹 奏 抄 店 湖

周

白水可飲

とくはる人帰海と越く
莊嚴よりと勢揃して稻毛に城跡を人ま川
清水源よりさばよむとるに都よりけねを
其本にさうとる各に都のさうのさう
川にさうとる

うと殿より家語も別表 道義

神代のは興はつる安藝の金探の川の鶴岡
月よりさう人月よりさうとるおねのね渡
まらくさく舟と渡りあさひのてきけるより玄桂
寫光より丁字柏格宅ハ舟敏者素素来る
和芝童ハ陸よりさうとる然るにね
朝六時より舟官の志舟はさ川さかの城に
川下よりせせは中川よりさうとるな
うより鶴岡よりさうとるさうとるさうとる
さうとるさうとるさうとるさうとるさうとる
里よりさうとるさうとるさうとるさうとる
船よりさうとるさうとるさうとる
其のさうとるさうとるさうとる
海 完

のみくしの月れ一おを新より
 外一の風を揺るきい
 井あそ丁本を揺るきい
 系も人れ風のききい
 同能な能を揺るきい
 利もあそやふ山崎の福
 くらよりあそやふ山崎の福
 茨城の川南田れり岸
 挽かりれ板を揺るきい
 うあかりのききい
 うあかりのききい
 うあかりのききい
 貴れ同きのかやうを

篤老 字松 宅丁 柏老 宅丁 柏老 宅丁 柏老

一
 八

ふりくろ庫裡のうしろの二月
 もろく風のやききい
 花もれ時もろくあね病起りて
 夏へりちゆきい
 酒りもろ人戸呂祭りめき
 後中けり一の年けりあふ
 柿もれ幕いさふ可角屋敷
 かへり桔梗よきい
 志あくとも食炉の灰ききい
 俄りけりけりけりけり
 いふき款を揺るきい

宅丁 柏老 宅丁 柏老 宅丁 柏老 宅丁 柏老

とあるは、ありたるをあらわすに、けり
 とあるは、肝つゝとて、酸とありたるをあらわすに、
 毫やうく存するは、能く保ちひつゞけたるは、奇蹟
 をいふことなり。またあらうとするは、あまのしづか
 り、また汝等といふものは、風流あるものなり。あ
 すむるは、物せ給ふべきことなり。又、ぬきよめ
 方の人々をあらわすに、降参くとあるは、これを今
 日、いまだ筆をとてけり。人々をさぐるを、まじ
 をみるべく、この人は、空合のよくあつく、次男は、大
 海よりなると書く。よう、明外、稲妻、言語、同氏の
 あらうとあるは、高き王君七やけ、六は、帝、おとし
 う、うへに、精は、あきらみ、うへに、只、ゆゑ、うへに、

たゞしめされし轉脚の如きはけさかきと云ふ
たりしれをまゐる世にせんく焼立れ點の天
ゆふりきとく如きをうけ高きよりきて如きは
さうて如きありし轉脚の如きはけさかきと云ふ
らちと云ふ

歟
食勝負

路宅 十五 玄帷 朱青 十

篤老景和七
齊湖素圭字柏五

立丁 巳 敏 之 之 童 一

けぼろは僕三人百もあつたおゆのねをきき
 けあつたおゆを一足ものこしあつたひくし
 五半対面とて小澤はかうけりかゝておのく

水もやうと涙を流すもくもくう 船つねより早し
 うせのきめを

冠は簪吸いのうていさき
 三子下りもくもくうけあ
 石葛もくもくうけあ
 何うもくもくうけあ 襟際
 さきうと着流のき流を返れろ
 鞠のおきをかきくしき
 三井寺は花もくもくうけあ
 ねのき流のき流を返れろ

結

餘與新古體句評定

筆影くかこもくもくうけあ
 さきおさおさき流けりうけあ
 あきやわねもくもくうけあ
 きりやわねもくもくうけあ
 垣際一色は菊はくもくうけあ
 新邸や高き花うもくもくうけあ
 ゆく秋は雀のき流は文文し
 風の鳴るもくもくうけあ
 さきより花もくもくうけあ
 曉の川 幅いろくもくうけあ
 女所は花もくもくうけあ

系和 筆先 芝臺 敏英 林青 玄性 立丁 路完 守柏 素主 奇風

松字 雨砌 寔者 罽中 年庵 双蛇 江九 秋芝 和切 夢白 為曉

十

永和

篤先 其臺 敏吳 求青 玄性 立丁 路宅 宇柏 素圭 奇園

高しむとあゝいふうりも
 吉中とあるあきなりまの秋
 めい入ゆと流るるなり
 浮き花をふきし 晴の空
 蕎麦刈ふ村の口もや早稲
 山陰のそはよりおるおき
 宿風や九月はおひひま
 け枯れ葉もてゝ有る垣根
 茅のうらの時ふるぬかし
 灯よりて菊は山崎のなり
 野の川やうんもる人海

能十

松守
 雨柳
 女
 最中
 午庵
 双蛇
 江元
 秋芝
 和切
 夢白
 為暖

文法も女よりき月乃るも
 采儀もねてきくも秋のくま
 菊の上もたけなりまの
 山のふもとをたつての
 雨もれ晴もるなり
 牛馬も蕎麦あうりも
 梅りやうりもなる
 山のふもとに秋の風
 赤い菊はなり秋の月
 色もれ名なり秋の
 りのふもき井もれ
 稲うけのつをりや

後川
 桐元
 五由
 僧
 五朗
 女
 文記
 四方
 左玉
 古江
 石我
 雉郷
 五麻

名而組と云ふは其れ人の名をなとてかきりきされ
 ぬと云ふ事なり其れは名をなとてかきりきされ
 うと云ふ事なり其れは名をなとてかきりきされ
 名而組と云ふは其れ人の名をなとてかきりきされ
 かきりきされ其れは名をなとてかきりきされ
 名而組の一人きりきされ其れは名をなとてかきりきされ
 立丁と云ふ事なり其れは名をなとてかきりきされ
 といふ字柄といふ事なり其れは名をなとてかきりきされ
 病それなり人のくさなり其れは名をなとてかきりきされ
 けりけりけり

對升ト振

篤光

今朝起しけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 曲窓のきりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 豆まきけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 そりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 うけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 せりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 名而組にけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
 病それなり人のくさなり其れは名をなとてかきりきされ
 けりけりけり

篤光
 宇松
 立丁
 松
 宅
 丁
 宇

川内へ極女をいれし三原と
 才藏の宿より費本をいれ
 ありし處を塩町の町に
 坂のふもとに月吉川に
 まうち並べし其後まつたけの
 位牌に蜂を祀りしをわ
 朝のうちはおひを釣るは
 さく緘をいけりる水
 代友れ下知れりるま
 探板の海をまてり小糸
 家れおゆる花のてり門
 けりした津より皺より

先 宅 下 宇 先 宅 下 宇 先 宅 下 宇 先 宅 下 宇

中風を仰ぐ乾少の彼時を
 年貢のふ角豆たるは
 月うけよりの中法を揚る
 いれたるたるをわくつ
 并ふは具又ありしき
 ありしはありしき家
 並に籠又火をやうの
 山ははちのちをわく
 ひくんのまけしをわ
 舞をわくしをわく
 子徳をわくしをわ
 於粉のわをわくし

宅 下 宇 先 宅 下 宇 先 宅 下 宇 先 宅 下 宇

昔は清く水は公より花は雨
木履少くもむ凍解の道

字
華

たうくともあうはまもなきこ
おきまはまもあつ秋の雪をうけ
八朔の拍とかりきり市井重
たれもや甲けくつをきりか
おわつては流しけり秋の雪
雪はまのけりけりけりけり
山うまはけりけりけりけり
とり火やなかりけりけり

素主
西砌
敏彦
系和
立下
松字
篤光
字柳

結十

秋の雪をうけけりけりけり
あきまや八月の雪はけり

芝堂
格宅

右雨組十人

文化に年丁卯中秋

廣嶋雨屋截版

朝乃け花葉をふりて花盛
かひも并なつよけ板

記 訓

いさゝか

花つゝ木中のさかしくまき
あなまひくくさるゝの体
山りけ福居よのむさる屋の括
むさるくくさるゝをさるゝ
月ほく福居よを種をぬく
ようけ板を風やむさる
拾つゝさけ福居よを秋の

奇園 楚山 弁里 糸記 八之 后柳

世帯勝人あま居合場
ありくくさるゝを種をぬく
席子け種をほく 陽を
めつゝさるゝをさるゝを
灯もかきまひ佐聖の事
六巻二巻たかきあけ家
地蔵の籠をうけくさるゝ
桔梗をさるゝ月けくさるゝ
さるゝけくさるゝをさるゝ
おのりくくさるゝをさるゝ
さるゝのちよなまをく
さるゝくさるゝをさるゝ

手記 一篇 訓 字 山 之 記 枕 字 訓 之 山

測字柳耑枕山之測字柳耑

柳杞梳山之

朱和 一為 王松 八之 后柳

竹里 悟犬 楚山 蓮字 井湄 奇園

月一^リとて出たまふ屋々人目をかかれやと。
 あれくもかるけんやかれ病れうたあまむ
 とよりいるるのまねうみかき
 二月見づい候勢はぐいの花さき。桜校が子
 かや小車にうれうあなわめかのまゆ
 なりけかもしゑそむをきし。ききぬく月
 はよなるかれめの洞は是も村をあらぬ。

せうし隆きうのうかきくあまも入歯
 ちうしれけいしうはくわもの江戸梁
 ありそれきく梁れちう年たてのへきより
 て人かくあされせしうや楽しれりせ
 しろしきまは晋子戯きききりのは
 素句をけしうたいひめきせしうそ亡
 父あけしうくふかきしうをあらはしき
 しうはあまおききしうしう今に果しは娘り
 其れをききし中よりきしう出として示さく
 しう何しれくむしうかきしうしうこの母と
 友ともれお旅の序よいつしう終し附白

二

をあひせく一冊しう一回ねのいし
 したくしうしうなこまは需ききしうてい
 けしうきしう加し

名月やえをちし物小綱
 新萱葉し人をけり
 秋もこれいし車は入しん
 危をしはけし細道
 柳は葉のあかしうけし
 しうしうしう城のきしう
 桃灯もしうしうきしう

成美 久城 心非 車西 曲阿 素玩 花

なつて居る身れとてうも
西風とてうもさる秋れお
仙とてうも印れもの田
飛騨山を横る雪うも故屋物
るしめてある見事れや
小酒やとあるひとてさ
ふる中ものさるひつと
尺八のひとてさる秋れ
身をさくうもさるひつと
晴れとてさるひつとさる
かくもさる秋れ長き寺
るありさるひつとさる

非友玩玩非友玩玩非友玩玩

お鶴とてさるひつとさる
赤城とてさるひつとさる
さるひつとさるひつと
懐旧とてさるひつとさる
人のさるひつとさる
九合とてさるひつとさる
そ入とてさるひつとさる
朝とてさるひつとさる
作とてさるひつとさる
ちとてさるひつとさる
苔とてさるひつとさる
落とてさるひつとさる

非友玩玩非友玩玩非友玩玩

夢を涌もむやういれおほり
寂しきやあうれを嘆きし
下綴へかき定かき一葉山より
新沢のいふくあうかうとき
灯籠さくちきとや草け家
朝うちやはまけ塔かきむ
あけきくくぬきとまきくはうけり
ときくと筑波とみでまきと嘆
門きくおとあてしと人秋のく
水けうへまけ葉けあうゆけり
若きまけ一日さうやはれれと
いふつ灯のまきとあう破あは

蕉心 薜六 一我 長閑 いと 仙骨 角子 曲河 永矢 不一 田化 市人

子八

蒼かきくく樹くいさくくう
まきくく帆さくくくくく
草けきくく人のかつさく
ゆけりあうつれ枯れあう
あうくく戸口まきくあう
あうまけとあうひさしたのへ
鴨けあう水りあうく梅のま

詠帰 魚道 錦成 松杜 醉月 文蝶 雲蘿

和歌題 忍恋應

東歌大王之命

百年莫必泣前魚綴作貞松意有餘
雨靜深園人不識血盟燈下數行書

谷神齋

春あむまけ白ひやもつゝも
兼嘆や田舎新翁妓う宿付
うつゝやうく人なももこれ
かまきり此岸ふかふれ二日月
山吹ふたりけりけりかゝ玉子
萩うもちりけりけりけり月
浦うも火を焚たてゝ夕もみ
扶柁系う春もはくや彼岸と
浅まけ種うやういとおくれ丁
はよあてゝ思かつゝるや春の宿
春をさへもて思や不破の月

素迪 西塘 太節 蒼城 春平 素月 李華 素英 花六 秋長

おのちく工合けりもきふとん
是をみく聖る何せんこまけ月
朝うほやうつゝおもまけ花
まけ我うあけあき春玉まつ
出いゝとふらけまり梅も花
まけまういゝ春いゝとふら
お出いゝやういゝ山や夜の月
かゝつゝりやういゝの春もあけ
三月月をえりやういゝやあけ
嵐うう朝ういゝとふら冬も
焼のりやういゝとふら中
おけりやういゝとふら中

一茶 素梨 美人 梨月 武日 葛三 かつる 有斐 春在 重初 百二 梅万

一村の川沿にあり 柳の南
 我ら龍有四月なかりと都
 高や子に極てふとくも菊は宗
 月は客丁まをくく時あり
 軍とてふとふかありひはま
 ひとあまふ山作ありはま
 何の本もまふいふやらふま
 夕陽よりいふとふれあり
 門よりありいふとふれあり
 雪は糞もふれありふ
 ちとふいふとふれありふ
 幼とふれありふれあり

士朗 竹有 女高 路白 文常 班車 五来 蒼机 雪村 武陵 滄洲 赤河

子十

啼きありふれありふれあり
 天をけあつとふれありふれあり
 春は及卯のふれありふれあり
 年少は潤りありふれあり
 あれ人とも七種ありふれあり
 起てぬふれありふれあり
 卯は花やおほふれありふれあり
 雪はふれありふれあり
 あれふれありふれあり
 あれふれありふれあり
 なるれふれありふれあり
 ひり蚊帳ありふれあり

井原 采彦 魯隱 長高 星瑞 万和 竹雨 朱和 希高 篤光 玄桂 櫻堂

かりけきまゝにちをたそき
 かまむまはうみくは枯尾毛
 出りりのみみおうく秋の月
 さひこの我よりおこる紅葉
 弱あゝと嘘うけく経木が
 木槿をけり葉かゝり花はひる
 ばかりのちやよとより旅病吹
 親さゝく行はるゝ女郎花
 タうややぬなうれも春をさ
 虫けけさるれちをたぐく

菊也 幽喃 日考 北谷 冥々 与又 し二 旌衡 巢西 年角

あけ葉のなまを

ふりこむく

あけのなま

や百ちやう

諫圃

撰者

心非 車西 久威

文化十二乙亥

